



TITLE:

## <學界展望> 訪中報告記

AUTHOR(S):

佐竹, 靖彦

---

CITATION:

佐竹, 靖彦. <學界展望> 訪中報告記. 東洋史研究 1966, 25(1): 106-111

ISSUE DATE:

1966-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152715>

RIGHT:

## 學界展望

## 訪中報告記

一九五四年日本の學術代表團が中國科學院の招待で訪中し、翌五五年中國科學院院長郭沫若氏を團長とする訪日學術代表團をむかえて以來、日中兩國の學術交流は困難な條件のなかで絶えまなくつづけられてきた。

特に一九六二年、アジア・フォード財團の現代中國研究センター設置の計畫は我が國の中國研究者に中國研究についての認識をふかめさせ、廣汎な科學者運動の潮流をつくりだした。更にこの鬭争と並んでより早くその前年から自分達の手で中國の研究者を日本にむかえ交流しようという動きが京都の研究者の間におこり、この提案が全國的な各分野で支持をうけ、多くの研究者の團結した力によって一九六三年末、科學院哲學社會科學部副主任兼法學研究所所長の張友漁氏を團長とする中國學術代表團の訪日を實現したことは兩國學術交流の新しい發展の第一歩となった。こうした動きは、ことに京都の場合、一九六四年の歴史的な第一回北京シンポジウムに積極的に參加することのできた一つの基礎であった。これらの運動をおしすすめるなかで、特に若手研究者の訪中の希望はたかまり、六三年の代表團の歡迎實行委員會が改組して成立した日中學術交流京都懇談會（代表世話人末川博立命大總長）がこの希望を科學院に傳えた。

こうして科學院の理解と、一九六四年秋訪中した日本學術代表團に參加された武藤守一立命大教授、森鹿三京大教授と、北京シンポジ

ウムに出席された井上清京大教授らの熱心な努力により、この希望は豫想外に速やかに實現されることとなり、日本側では同懇談會と日中友好協會京都府連合會學術交流委員會（武藤守一委員長）、日中經濟學京都交流會（代表幹事松井清京大教授）が派遣團體となり、中國の科學院が受け入れ團體となる形で京都の若手中國研究者四名（豫定では他に引率教官一名）を現在の條件の下では最高の期間である三ヶ月間中國に滞在させ研究學習させることが認められた。上記三團體はこの決定にもとずき一九六五年二月、各部門の研究者をつのり選考した結果、中國文學から入谷仙介・吉田富夫・興膳宏、歷史考古學から永田英正、歷史學から狹間直樹・佐竹靖彦の計六名を選び、語學その他の準備をはじめたが、公務員の渡航制限等の事情により結局九月に入つて、吉田・興膳・狹間・佐竹の四名を京都訪中青年中國研究者代表團の團員として決定した。代表團は互選により吉田を團長に選び、同年十月二六日神戸を出港し、同月三十日に上海につき、翌六六年一月三一日に天津を離れるまでの三ヶ月間中國に滞在し學習することができた。

我々代表團が訪中に際して希望したことは、狭い意味の研究面に限らず現代の中國の社會主義社會を自分達の眼で見、風土人情に接しこの面から自分達のもっている中國史像を正し、これを豊かなものにすること、及び新中國の學問研究の現實のあり方にふれたいということであった。科學院の側ではこうした希望を全面的に受け入れられ、我々の中國での學習、見學はおおまかに云つて、①大學・研究所・博物館及び記念館の訪問 ②主として新民主主義革命期の革命遺跡の參觀 ③人民公社・工場等社會主義建設の現状の見學 ④歴史遺跡と風物の見物、の四點を中心として行なわれた。日程と

しては十月三十一日に北京につき十一月十九日まで北京に滞在、同日午後北京驛を離れ、西安・延安・南京・上海・杭州・南昌・井岡山・長沙・廣州の各地をまわって十二月十七日北京に歸着した。更に五日後の同月二十一日に北京大學の留學生寮にうつり、例外的に一人一室を與えられ、以後歸國するまでの四十日をここですごすこととなった。

書かなければならないことは多いが、ここでは研究面に限り、それも狭い意味の研究動向は又の機会にゆずり、現在の中國における學問のおかれた位置と、前近代史研究の方向について記したい。

我々が中國滞在中最も強く感じたのは、四史編纂、半農半讀の開始、及び歴史上の人物評價の規準と方法への反省をきっかけとした歴史學のブルジョアの傾向の克服等にみられる學問、教育の變革が全面的に展開されていることであつた。

現在の大學教育のあり方を決定したのは、一九五八年に人民公社化の實施とならんでおこなわれた教學改革である。この改革によって①人民のために服務し學問を政治と結びつける、②教育と勞働を結びつける、③理論と實踐を結びつける、という教育の目的が設定された。

現在までの大學の學制は一般的には自然科學が六年制、社會科學が五年制で、社會科學の場合には三年級までが基礎科目を學習し、四年級五年級で専門課程に入る。五〇分授業で講義時間は割に少く例えば南京大學の史學科の例では四年級で一週十六時間、五年級で十二時間となっている。この五年間に集中的か分散的かは具體的な情況によって差があり各大學でも異っているが、大體十ヶ月程の間、工場や農村ですごす。これがいわゆる社會主義教育運動であ

り、この間、二日について半日を勞働にあて、残りの時間を學習、調査等の文化活動（四史編纂をふくむ）にあててゐる。

毛澤東思想の學習は全學生の必須科目であり黨史・政治經濟學・哲學に分け、うち哲學はいわゆる四論（實踐論・矛盾論、正確に人民内部の矛盾を處理する問題、人の正確な認識はどこからくるか）を學習することを一九六四年に決定している。マルクス主義の古典としては毛澤東選集の他、歴史系の場合、共產黨宣言、ドイツ農民戰爭、ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日、フランスの内亂、革命と反革命、家族と私有財産および國家の起源、ロシアにおける資本主義の發達等が必讀文獻であり、更に世界史の場合にはこれに資本論が加わる。

中國前近代史を専攻する學生の比重は南京大學や復旦大學のような古い傳統と整った圖書をもった大學では全體のうち二五%、世界史が二五%、中國近現代史が五〇%ときいたが、一般的には中國前近代史を選ぶものは一割にみたない。しかし當然のことながら厚今薄古というのは前近代史の無視ではない。南京大學で若手の研究者と話しあつた時この點について愚問を發したが、社會主義社會も先行する階級社會の歴史的發展であり勤勞者が自然と闘い階級抑壓と闘つて歴史を創造してきた過程を明らかにすることは歴史を正しく認識するために必要なことであると返答された。

日本の大學院にあたるものとして研究生の制度がある。これは自分の研究したいテーマにあわせて教授を選ぶので人氣のある教授に學生が殺倒する。試験は全國統一で行なわれ、この點は大學入試と同じである。年限は三年制、職員扱いで毎月四十數元が與えられ、更に一年に四〇元を書籍費として受けとる。因みに學生の一月の食

費は一五元程である。この間、大學院向けの講義のようなものはなく、指導教授の指導をうけて各自そのテーマを研究する。

この他、機關の幹部、工場の幹部、教員等を再教育するものとして進修生の制度があり、期間は不定期、おおむね一―二年である。人民大學などではその性格上この進修生が非常に多く、學生とほぼ同数の卒業生を出している。

これに對して教員としては、助教・講師・副教授・教授がいる。歴史系の場合は助教の数はほぼ教員全員の半数程度である。次に北京大學での見聞によつて教員の制度をのべる。卒業生はその後一年の校務擔當をへて助教になる。助教の任務は實驗講義以外の學生の指導である。助教を三―四年勤めると各専門部の討議を通じ高等學部の批准によつて講師となる。講師は講義の他、一定時間助教と同様に學生の課外活動を指導する義務があり、一週の五分の一から四分の一の時間を自分の専門研究につかうことができる。副教授は三分の一の時間を學生の指導、講義と公務に、残りの時間を研究につかう。教授は論文指導が主な任務であり、一週三〇時間を研究にあてることができる。講師以上の講義時間は一週に二―四時間が普通であるが、そのための準備の努力は大變であるという。助教が全時間を學生の課外指導にあてているわけだし、講義は實質的で程度が高い。

一般に學生が教員の考えに不満であつたり新しい問題が提出されたりすると、多くの學生の賛成があれば討論を組織する。討論は個人の學習と小グループでの検討を基礎として相當の準備過程をへてから教室の討論にもちこむ。より簡単に自分の意見を發表するためには掲示板を使った公開書簡形式があり、ここでも卒直で徹底した

批判が展開されている。

學生と教員の仲は極めて親密であり兄弟か仲間のような感じをうける。ことに秀れた教師に對する學生の敬愛の念は強い。このような研究と相互批判の中から生みだされる論文を發表する場としては校刊と學報がある。學報は教員と學生で作られる教研小組の研究成果を發表する場であり、學生の卒論を發表することもある。これらの成果を總括するのが校刊である。兩者とも各大學の内部交流のためのもので一般研究者の手にわたらない。これは一種の自力更生の原則のようなものであると思われ、各校各系の實狀に應じてある程度の未熟な研究をも許容しようということと、著者と讀者の意見交流により誤りをすぐ訂正できるという點からの措置であらう。この外、各校各系で教學の參考資料を出しているがこれも内部資料である。

歴史學の教科書としては郭沫若氏主編の中國史稿と、翦伯贊氏主編の中國歷史綱要がある。前者は科學院の歷史研究所が主體となり外部の研究者をもとめて編纂されたものであり、後者は北京大學の歴史系で編纂したものである。兩者とも近く改稿する豫定である。この教科書も大學外には出していない。

以上は大學教育のあり方についての簡単なノートであるが、學問研究を政治・労働・實踐と結びつけるという方針とならんで、労働者・農民の知識化が一貫して計られてきた。

歴史系の場合、兩者の接點となるのが四史編纂運動（家史・村史・工場史・人民公社史）であり、これも一九五八年の教學改革以後の社會主義教育運動の一環としてとりくまれてきたものである。

四史編纂については歴史研究にも昨年のみで七篇の論文が掲載さ

れているが、北京四史叢書（現在まで八冊出版）を編集した経験を總括した趙有福、黎凱氏の「試論編寫和研究、四史の重大意義」（六五年第一期）が基本的な問題点をしらせてくれる。幸い南京に滞在した際、浙江省哲學社會科學研究所歷史系組長の姜志良先生に四史についてのお話をうかがうことができた。先生はほほ我々と同輩とみうけられる小柄でおとなしい方である。

話は江蘇省の例によつてすめられた。江蘇省についていえば農民が大多數をしめているので家史・村史が中心となっている。現在出版されているものは二種である（現在四史を本格的に出版しているのは北京と上海であるが、各地でもかなり出版され、例えば廣東では解放軍史を加えた五史がでてゐる）。

四史編纂についての全省の統一的な計畫はない。これは何より四史が労働者農民が自分の歴史を總括することを目的とした大衆的な歴史運動であることによつてゐる。學生や研究者にとつてこの活動に参加することは學術研究の機會であるとともに自己改造の機會である。彼らは四史編纂に協力するがその主體は労働者農民である。従つて例えばある村で人材がなくて四史がかけない場合は、その村で書ける人間が出現するまで待つてばよいし、その村の中學の卒業生でも農民と共に四史を作れる。

主要な問題點は、搾取の方法（地租とその内容・勞役・高利貸・傭工・附加税等——例えば江蘇では地租の錢納は少ない）、農民の苦しさの程度、政治的權利、經濟の破壊の程度、革命闘争の方式（特にすぐれた點は英雄人民史の形で詳細に調査する）、解放後の生産の發展情況（社會主義建設の發展、農民の手による科學實驗の進展）と解放前の狀況、闘争との關連、等である。

一般に農民は物語風の四史を好むが、このことと事實追求との間の矛盾は、歴史的眞實を傳えるか否かによつて決定される。そしてこの決定は、その場で生き、歴史を作つてきた農民が心の底から歡迎し自分の歴史としてうけ入れるかどうかにかかつてゐる。先生は最後に、農民がこのように歡迎する四史を書ければ全ゆる學術研究の問題もそこから解決できるし、そうでないならいかなる學術研究も成立しないと力をこめて話をむすばれた。

このように自らの歴史を總括した農民が、「何事も海青天のおかげ」という吳晗氏の「海瑞罷官」にえがかれた農民像を肯定できないのは當然であり、人物評價論争が深い根をもつてゐることが看取できる。

一九五八年以降のこのような思想改造の運動の發展の上に最近歴史研究者にとつて注目すべき二つの動きがあらわれた。一つは大學における半農半讀運動の展開であり、一つは歴史研究そのものにおける新しい動きである。

半農半讀運動は「五年試驗・十年推廣」のスローガンの下に、肉體勞働と精神勞働の統一という社會主義革命の大目標を追求して展開されている。我々が訪問した中では、西北大學・南京大學・中山大學等がすでにいくつかの系で農村への移住を開始していたが、一般に、中文・歴史系の學生からはじめてゐる。

北京大學歴史系の農村への移住も今年の一月末に行なわれ、我々もトラックのつて十三陵ダムの近郊にうつる彼らを見送つた。はじめての経験でもあり、一沫の不安はみられたが、皆大きな期待をもつてゐた。圖書は、歴史系圖書館のものは農村にうつし、それ以外のものについては専門の自動車があり、カードを書くとい週間に内

にとどけてくれるそうである。農村での生活は、社會調査・勞働その他の仕事の時間が2、講義と學習の時間が3の割合になつてゐる。

研究面での新しい動きについては、紅旗から歴史研究の一九六六年第一期に轉載された科學院歴史研究所副所長の尹達氏の「必須把史學革命進行到底」が基本的な問題提起を行つてゐる。

我々は幸運にも歴史研究所を訪問した際に尹達先生にお目にかかることができた。先生は六十才とうかがつた。溫顔瘦身、農民的な親しみのある風貌であるが話が佳境に入ると大きな身振をまじえて生々と語られ強い氣魄が感じられた。國民黨支配下の南京の中央科學院をのがれ延安の革命運動に参加された生えぬきの革命家であり研究者である。尹達という名はその時つけたペンネームを踏襲してゐると聞いた。これは北京大學の研究生にきいた話であるが先生の書かれた四史は農民が涙をながしながら讀んだということである。

先生は現在の歴史學のブルジョア的要素を批判された後、歴史學の新しい人材は實際の階級闘争と理論闘争の中から生みだされるべきであると指摘され、研究生の制度については、こうした闘争から離れ、教授の指導をうけて研究に没入するという性格をもち、ことに社會科學については研究生は不要であると考えてゐることを明らかにされた。

研究所の體制については、現在までの原始・古代、封建社會（唐までと以後の二班）・少數民族史、思想史の各班の他に、新しく物質文化（責任者張政烺氏）、歷史地理（社會發展と關連して研究する——責任者は姚家楨氏）、軍事史（階級闘争・民族戦争・支配階級内部の戦争等の法則を明らかにする——責任者は白天氏）、史學史

（責任者は尹達氏）の各研究班がつくられ、各班の主要な研究員は大學卒業後まもない若手であるとのことであつた。ここにも前近代史研究上での新しい動きがあらわれているように思う。

この他前掲中國史稿の現代史の部分を完成するのが當面の仕事であり、その後、各時代、各分野の研究を組織し統一した觀點のもとに意見の交換と討論を行い新しい通史を書く豫定である。これは公開出版される。

資料整理の面では、歷代文物歷史圖譜の第一部を六六年末か六七年初に出版する他、甲骨文の全面的整理、清朝檔案と孔府檔案の整理を行つてゐる。

最後に北京大學潜在中の學習について報告したい。

北京大學では丁度冬休みにあたり、又今回の訪中の性格からしても講義をきくことはできなかったが、筆者は北京大學の教授で前近代史部門の副主任の旺鏗先生に平均週二回の指導をうけることができた。

先生は現在四九才、一九四五年まで雲南におられ、前近代史を研究、のち現代史を學び自分でも現代史研究にうつりたかつたが革命の要求のため、つづいて前近代史を研究しておられるとのことであつた。以前の寫眞を拜見すると非常に肥つておられるが、數年前大病を患らわれ現在ではむしろ瘦弱である。學生時代はバスケットをやつておられたという。現在でも日中の卓球試合は必ず見物にゆかれるそうで、雑談の際によくスポーツの話がでた。明かるく親しみやすい先生であるが、現在でも餘病があるそうで、半農半讀の開始とともに多忙を極める日々の中で、つかれた顔もせず熱心な指導にあたられた先生のことを思いだすと感謝の念にたえない。

ここでは封建社會分析の基本的視角についての先生の見解を記しておきたい。

まず毛澤東思想以前のマルクス主義の古典からえられるものとして、①小農生産、②封建的大土地所有、の二點が最も重要であり、これと関連して、③自然經濟、④經濟外強制、⑤農民の土地への緊縛、の五點が封建社會の基本的特徴として考えられる。

次に毛澤東思想、ことに矛盾論・中國革命と中國共產黨・人民内部の矛盾等によって、①矛盾の普遍性と特殊性（このことによつて例えば同じ資本主義の範疇の中での産業資本主義から帝國主義の段階への發展を理解でき、同様に封建社會段階内での發展を明らかにできる）、②一切の社會の基本矛盾は生産力と生産關係の矛盾と上部構造と下部構造の間の矛盾である、④同一の社會形態内においても生産力の發展のみならず、生産關係と上部構造の面でも一定の變化がある、⑤封建社會内での發展の動力は階級闘争であり、農民戦争による王朝の崩壊のみならず、社會の通常の發展もたとえ小規模であっても農民戦争やその他の勤労者の闘争の結果としておこる、の五點を引きだせるとされた。先生の歴史分析は一貫してこの理論とくみあわさっており、特に毛澤東思想による第五點を歴史上の農民戦争の評価の問題やいわゆる王朝の讓步政策という考え方の批判として具體的に説明されたことは重要であると思う。

この他具體的分析の面で、均田制は貴族大地主に對する限田策であるとともに中小地主の發展にみちをひろくものであり、均田制の施行された時期全體が封建社會の前期から後期への過渡期であるとする見解など極めて興味ぶかい考えをいくつかうかがったが、ここでは旺先生個人の見解を記そうとしたのではなく、新中國の現在の

歴史研究の方法を示す一例としてあげたので個々の具體的な問題についてはふれない。

北京大學滞在中には又、宋代史の鄧廣銘先生の御宅を訪れ、宋代史研究の現状や王安石變法についての御意見をうかがったが、話が具體的になるし紙面の餘裕もないので残念ながら割愛する。

この他各地で大學を訪問し多くの研究者にお會ひできたこと、とくに復旦大學では楊寬先生にお目にかかれたこと、翺伯賢先生、侯外廬先生の御宅を訪問できたこと、侯先生とともに六三年に來日された劉大年先生に再會できたこと、北京大學講師の張文波先生に四論の講義をうけたこと、日常につきあつて意見を交換した北京大學研究生の廖偉章、趙春晨、李裕民の諸君のことなどふれられなかったことはあまりに多く心残りである。

訪中期間中の科學院の我々の學習に對する周到な配慮と、大學・研究所・博物館或は人民公社・工場や各地の人々の友誼は全く感激という以外の言葉ではあらわせないものであつた。この報告記を草している間にも數多くの人々の思い出が腦中を去來して實になつかしい。激務の中での張友漁先生のお心づかいをはじめ、終始一貫して我々の指導にあたり面倒をみて下さつた科學院對外連絡處副主任の宋守禮先生、旺鏗先生とともに多忙の中を我々に對して獻身的な指導をおしまれなかつた北京大學の近代史の陳慶華先生等、あつて友情と厚意の數々について書きだせば際限がない。ことに宋先生が一月間の國內見學の行をとにもされ指導にあたられたことは未熟未経験の我々にとつてこの上なくありがたいことであつた。

最後にもう一度これらの方々に感謝し、日中兩國の學術交流と友好の發展をいのつて筆をおきたい。

(佐竹靖彦)